

男子部

「身体感覚を通じた知の探究」

酒井 恒太

材料を選び、一から創作する。男子部における美術教育の軸は、どんな限られた環境においても、創造出来る力を培うことにある。これは一見してとてもシンプルなことの様で、求めていることの本質は非常に深い。しかし、この日々の学びの継続が、美術教育という枠を超え、生徒一人ひとりの未来へ通じる創意工夫の精神と力となると考えている。

このような教育目標の下、男子部では「木の学び」を大切にしている。これにはいろいろと理由はあるが、第一に多様な自然素材の中で、一番身近であるということが非常に大きい。それは日本という国が緑豊かな土壌に位置していること。身の回りには建築や家具、道具など多くの場面にそれを実感することができる。私たちの生活は木という素材との関わりの中で、長い歴史を通じて世界にも稀にみるほど、素材、そしてそれを加工する道具や知恵、技術が積み重ねられた文化の中にあるのである。

自由学園は都内に位置しながらも、まさにこういった環境に大変恵まれている。教育の場として、先述した本質を生徒たちが理解し自ら育む場には最適な環境といえる。木々や草花などの緑豊かな学園生活の中で育まれる感性を、そのまま身近な素材に落とし込む学びは、生徒たちの心身の健やかな成長を期するとともに、日常生活での体験と結び付いた、ごく自然な学びであると考え。子供たちは「木の学び」を通じて、自身が本来持ち合わせる創造の力を自然に培ってゆくことだろう。そして私たち教職員の、自ら深く考え学ぶ力を培っていく環境をあくまで補完してゆくという姿勢こそが、子供たちの本当の力を育てる上で大切なのだと確信している。

I. 美術展に向けての準備と活動

1. 木工教室自治区域

今年度より木工教室が新設され、自治区域に組織された生徒たちの活動は、今回の美術展において非常に広範囲にわたるものだった。ここではその活動内容について記しておきたい。

まず一つ目に、今年度はより展示のイメージを具体的に考えていきたいと考え、初めに記念ホールと男子部体操館の模型を製作した。製作にあたっては木工教室自治区域の生徒たちと何度も打ち合わせをおこない、どのような材料で作るかを考えた。実際には、柱材として過去に使用されたヒバの古材を再利用し、男子部らしく木製の模型を製作することにした。新設された木工教室とその設備機械を有効に使い、今後も引き継いで使っていけるようにという思いもあった。また展覧会会場模型の他にも、作品展示用の巨大パネル30枚も併せて製作した。実際の製作では、高等科生が大型機械を使つての製材加工の工程を担当し、中等科生が主に組み立て作業をおこなった。

これらの作業は比較的早い段階から製作にあたって打ち合わせを重ね、一学期中に展示会場模型を製作し、学期末から夏休み中にかけて資材を調達、二学期はじめ

からパネルの製作に取り掛かることができ、自治区域の時間を重ねて、展覧会一か月前にはすべて完成させることができた。こうして、木工に関する大型機械を実際に使う作業経験は、生徒たちにとって大変に貴重な機会になったことと感じている。

また前回開催した際に集計したアンケートから、来場者の休憩スポットの不足も課題として挙げられた。そのため今回、学園内で伐採された丸太や、高等科二年生が名栗の山から下した丸太を利用し、新たにベンチを数台製作し各会場のスペースに設置することにした。会期中に、自身の手作り木製ベンチを利用している子供連れや年配の来場者の喜ぶ様子を実際に見ることで、製作に関わった生徒たちは、きっと知識や技術だけではなく、モノづくりにおける喜びに触れることができたことと思う。



「養豚をモデルに男子部の看板制」



「ベンチのリフレッシュと準備作業」



「鉛筆立てとカードスタンドでカラフルな街に」

開催期間に販売したクスノキ材を使用した鉛筆立てとカードスタンドの制作にも、木工教室自治区域の生徒たちは大きく活躍した。合わせて約200個の木工品を、一つ一つ手作りで丁寧に仕上げた。最後には着色作業もおこない、同じ色が一つとして無い、本当の一点モノにこだわった。作業工程で知識と技術を習得したとともに、自分たちが制作したもので多くの来場者と幸せを分かち合えた経験は、何にも代えがたい良い学びとなったであろう。1か月に及ぶ多くの時間と労力をかけたモノたちは、二日間であつという間にほぼ完売し、生徒たちが自信に満ちていく様子を、

印象的に覚えている。

その他、会場全体に置くための掲示板の土台も新たに40個ほど製作した。中空のアルミ角材を適当な長さにグラインダーでカットし、三角形の土台の型枠を木工機械で製材する。そしてセメントに適量の水を加え混ぜ合わせ、型に流し込むと同時に、角材を垂直に立て硬化するのを待つ。至ってシンプルで単純な作業ではあるが、各過程で精度が求められると同時に、大切な学びや気づきが多い作業でもあった。



「セメントを流し込み、掲示板用の土台作り」

2. 展示のレイアウトと会場構成

展覧会直前まで生徒とともにできる限りの作品数を揃え、会期二週間前によく展示レイアウトの構想に入ることができた。木工教室自治区域の生徒とともに、2つの展示会場の模型を一学期中にすでに製作していたため、模型と会場写真をもとに、レイアウトのイメージを構築した。担当の生徒の意図をベースに、美術科としての自身の経験値から、より魅力的な会場の演出にするために多少の変更を加え、直前1週間前に最終的なレイアウトが決定した。

展示作品は基本的に、授業で生徒たちが作った作品群をカテゴリーで分けることにし、ブースごとに木工や木炭グッズ、墨絵、色彩構成など、大きくジャンルで分けた構成を試みた。これは学年別の展示構成を考えた場合に、様々な表現技法が均一に全体に広がることで、会場全体が煩雑になると思われたためでもある。学年を問わず大きくジャンルに分けた展示構成により、空間に一定の秩序をもたらす効果を期待することができた。またこの展示方法により、各ブースで同じ技法を用いながらも学年ごとに表現の違いが見られることで、生徒たちの成長の過程や表現の違いの面白さを比較鑑賞することもできた。この点において、来場者にとっては大変に興味深かつカテゴリーごとにま

とまった、分かりやすい展示構成になったことと思う。

また、各学年の合作作品はスケールの大きさからも、展示全体の雰囲気をもとめる決定的な役割を果たすため、屋内外での配置には特段の配慮を要した。特に印象に残るのは、太陽とジンベイザメをモチーフに、巨大なコラージュ絵画を制作した中等科一年生の合作である。アルミ材が画面に散りばめられていたため、作品の印象が光の具合に大きく影響を受ける。天候の条件が良ければ是非とも野外に展示したい作品だった。しかし耐水性の問題もあり、天候次第で野外に展示するか屋内にするかを非常に悩んだ。直前の1週間前に最終的なレイアウトが決定したことは、これに起因するところも大きかった。

一方で、高等科3年生が取り組んだ影絵のための暗室を、どこに確保するかということも何度も検討を重ねた。他の合作同様に男子部体操館に設置する場合の問題点、委員室や音楽室等の案が出る中、最終的には中等科教室一か所にまとめ、土足でも上がれる様に養生をすることで、野外展示の一環として暗室を見せる展示案が最善と判断した。

最後に、高等科一年生の平面担当が制作した、浮世絵をモチーフに取り組んだ巨大絵画の展示方法についても少し触れておきたい。大きな画面を分割し合作制作することは、完成まで制作過程においては非常に合理的な手法である。しかし一方で、完成した各画面を一つの壁面として裏打ちすることや、その巨大な壁面を空間にどう展示するかという問題に関しては非常に大きな技術的ハードルがある。その作品を最大限魅せるためには、感性とイメージ力に加え、それを確実に実現するための、ある程度の知識と技術が展示の際に必要なようになってくるのである。これについては経験のある場合を除いて、生徒の基本的な知識・技術とは一線を画す。幸いなことに、高等科一年生にこの面で非常に感覚の優れた生徒が一名いたため、こうした画面の張り合わせや設置に大きく寄与してくれた。中等科三年生によるテラコッタレーフの合作を展示するための、ゆうに4mを超える枝を空間に構成した大きな支持体も、ほとんどこの生徒が一人で作り上げたことは、美術科として一番の驚きでもあった。間近になるにつれ常務組織とも連携が緊密に取れるようになってくると、各々の協調により無事に展覧会2日前には各作品とも、それぞれの所定の会場位置に搬入することができていた。これは生徒一人一人もそうだが、高等科三年生の常務担当が尽力してくれた点が非常に多く、生徒が主体的に運営に携わったという点で大きな成果

であった。その後最終的な配置へ微調整をおこない、各作品がそれぞれに互いを最大限引き立てるようなバランスに整え、無事に初日を迎えることができた。



「枝を空間的に組み合わせた支持体と作品」

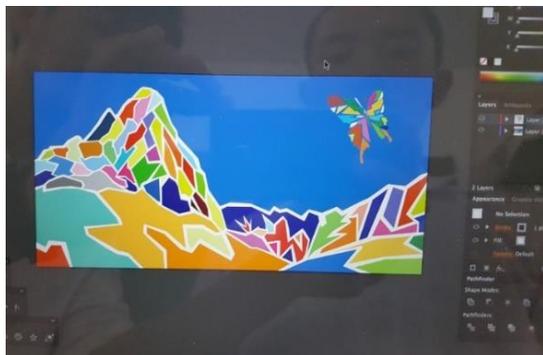
展示としての反省点は、担当生徒が会場レイアウトを考える際に、本来美術展に出品される全学年の全ての作品群を把握していなければいけないわけだが、実際にはかなり難しいところがあったという点である。これに関しては自分自身も過去に生徒たちが作った作品の所在確認に始まり、一方で授業にて生徒たちが作る新たな作品の管理にまわる中で、初めから全ての作品を把握できなかった自分の立場からも、担当の生徒との共有が状況的に厳しかった。とにかくレイアウトは後回しで、会場を満たすに十分な量の展示作品の制作を最優先に動いた結果でもある。この点に関しては次回からは余裕をもって、担当生徒との入念な打ち合わせが確保できるだろう。

3. 正門前モニュメントの制作

4年に一度の美術展には、毎回正門前に美術展全体を象徴するモニュメントが制作される。2016年度の今年は、この正門前モニュメントを男子部で制作担当する運びとなった。

制作にあたって、まずどのようなモニュメントで演出するか考えなければならない。過去の展示資料を参考に美術展リーダーとも話し合いを重ねた結果、今年は大きな平面表現で演出する方向でイメージを検討していった。初めに画面に表現するモチーフを決めることにした。男子部らしさを表現するには学びの生活を画面に取り入れる必要があるだろうという意見から、中等科と高等科ともに共通の経験として、一学期の登山をテーマに設定した。6月に中等科

が蝶ヶ岳、高等科が槍ヶ岳に全員で登っていた。これをコンセプトに美術展リーダーがグラフィックソフトを用いて、もとなるデザイン画を制作した。こうして、槍ヶ岳の山頂風景に蝶が舞う風景をカラフルな色彩で表現した。



「Illustrator を使って生徒がデザインした」

次に実際に表現するためにどのような技法を用いるかを検討しなければならない。日常の生活においても自然な技法表現でなければならないし、かつ特別な技術を必要としない方法を考えなければならなかった。そこで、普段生徒たちが授業において制作活動をする中で出る木の端材を用いることにした。また色も同様に生徒が使い切れなかった絵の具を有効活用することで、制作過程に合理性を持たせることができたと思う。様々な色、サイズ、形の端材を同色系に分類し、毎日少しずつ材料準備をおこなった。



「着色した端材を利用し、デジタルな印象に」

完成予定サイズはコンパネ7.5枚分、およそ高さ2.7m、横4.5mの作品を想定し、並べたパネルに下図を引き延ばし転写した。そこへ色別に分けたカラフルな端材をあえて整然と並べるよう画面へ貼り付ける。技法の特性上、単純

作業の繰り返しが多く根気のいる作業ではあった。しかし、作業を進めていくうちに徐々に全体の雰囲気が出てくると、生徒一人ひとりが「ここはこの色の方が良いのでは？」など、色彩構成を意識した作業を自然に考える様子を伺うことができた。図面通りに作品を完成させるより、制作過程の中で、より良い結果を生むために創意工夫の精神が養われている時を生徒たちと共有できたことは、自分にとっても貴重な喜びの瞬間でもあった。一つ一つ手作業で色を塗った端材は、同色系の中でも微妙に色が異なり、整然と並んだ様子はデジタルな印象を与えつつも、どこか温かみを感じさせる不思議な表現に仕上がった。

画面が完成すると、最後に正門前の現場にて設置の問題をクリアしなければならない。ここでは大きく3つの課題を各々の生徒たちに課した。まず一つに画面を組み上げ、安全に自立するための構造を作ること。二つ目には画面の表現に合わせて“自由学園 第31回美術工芸展”の文字デザインを創作し制作すること。そして三つ目には設置場所に合わせ、最終的な作品の印象を決定づける、ライティングを吟味することである。これらの課題に対し、それぞれに作業を受けてくれた生徒は、何度も何度も繰り返し最善を尽くし、最高の合作を作り上げた。実際に美術展初日を迎え、来場者が一番初めて見る作品、また美術展全体を印象づける作品として、大変に反響があったことが、何よりも嬉しかったことと思う。



「設置・ライティングを終えて」

4.ワークショップ

今回の美術展では、藍染を来場者の方々に体験してもらったワークショップを企画した。当初から担当の生徒2名が藍染を強く希望していたため、意見を尊重しあえて徹底的に自分たちで事前準備から当日の運営まで任せることにした。看板のデザインや会場の雰囲気作りなどに関してはア

アイデアを提供しつつも、ほぼすべての過程において生徒が主体的に取り組んだ。かなり早い段階から構想しつつも、藍のグラデーションを意識した手作りの看板から、名栗から運んだ丸太でテーブル作り、様々な染め方を掲示し、さらに木彫りで絞りの名称を表記するなど、前日まで出来る限りの演出への工夫を凝らしていた。その成果もあり、予定していた材料数は雨天にもかかわらず初日でほぼ完売した。追加で翌日は倍の数を用意したにも関わらず、参加者の数が予想を遥かに上回り、展覧会の終了を待たずして完売した。



「それぞれに個性的な藍が染まる」

II.各学年の合作制作について

今年度は4年に一度となる美術展の年であった。本来先述した男子部の美術教育目標に基づく学びの成果を展示発表し、教員・生徒ともに過去数年間の教育実践を一堂に振り返る良き機会といえよう。しかし今回に限っては、新たな男子部の目標を設定したのが今年度からという事情があった。よってここでは、美術展へ向けて二学期におこなった、合作制作を中心に振り返りたい。

美術展へ向けた合作の話し合いは、一学期始め4月より始まった。美術展リーダーと初めて顔合わせをおこない、今年度の美術展に向けての方向性を共有した。その際に担当の高等科三年生より、各学年が美術展に向けて合作を1点ずつ制作するといった積極的な提案が出ていた。その後、各学年にも美術展の学年リーダーと副リーダーを設置し、今年度の美術展の方向性を報告・共有した。各学年リーダーは主体的にクラスをまとめ、定期的に合作制作に向けた話し合いを生徒主導という形でおこなった。5月の連休明けには美術展リーダーと二回目の打ち合わせをおこない、合作制作に向けて参考となる技法や表現方法をまと

めたファイルを作成した。各学年リーダーは、このファイルを参考にクラスで話し合いを重ね、それぞれの学習段階に合わせ実現可能な技法をクラス全員で決定した。美術科としては、美術展までの制作期間とスケジュールの確認や、必要な工具や材料の調達方法に至るまで、生徒たち自身で考え判断させるよう徹底した。美術科側は美術展リーダーとの打ち合わせや、実際の制作にあたっての必要最小限の補助に徹し、実質的な合作の制作は、あくまで美術展リーダーと各学年リーダーが主体となって進めた。

それぞれの学年が制作プランに基づき準備を整え始めたのは、夏休み明けからの二学期に入ってからである。そして実質的に制作に取り組み始めたのは体操会後の美術展1か月前になってからであった。各クラスとも展覧会が近づくにつれ、互いに時間を調整し、強調する姿が良く見られるようになった。そして展覧会前日まで最善を尽くす姿が見られたことは、美術科にとってとても喜ばしいことであった。以下、各学年の合作に焦点を当ててみていきたい。

1. 中等科一年生

一年生の授業作品は、墨独特の滲みや濃淡を効果的に魅せた植物の墨絵や木の端材を構成した鉛筆とペン立てが並んだ。二学期に美術展に向けて制作した初めての合作は、縦3.6m、横2.4mの大きな画面にジンバイザメと太陽、そして浪が大胆に構成された作品である。16枚のパネルに分割された画面をみんなで分業して制作した。



「学園の自然をコラージュした画面を囲んで」

アサンブラージュする素材はすべて学園で採取したもので、木の実や木屑、木の表皮などがメインである。ジンバイザメの斑点模様や太陽には女子部で出た銅やアルミ、真鍮などの金属端材を有効活用した。色彩と物質的なテクス

チュアのコントラストが非常に印象的な効果を生み、モチーフによって効果的に配置された技法は、一年生らしい素朴な素材の扱いながらも、同時にプリミティブで力強い表現へと繋がっていた。

2. 中等科二年生

二年生は、丹念に形を追いかけた木炭デッサンや、天然石を使った篆刻、油絵やコラージュといった作品が並んだが、なかでも4つのグループに分かれて制作した木版画はとて印象強い作品だった。干支の猿をモチーフに、9分割された木板を分担して彫り上げ組み合わせた版画である。紙に予め色をのせておき、後から版を刷ることで版と色彩に微妙なズレが生じるが、それがかえって手作りならではの画面に仕上がった。

額に使った表皮付きの材は、新設された木工教室の作業台を制作した際に出た端材で、本来捨てられるものをあえて額として使用したところが良い見立てが息づいている。美術展に向けてクラス全員で取り組む合作のテーマに選んだのは文房具である。文房具という身近なモチーフを巨大かつカラフルな色彩に仕上げることでオブジェ化に成功しており、大変ユニークな発想の作品である。学園中の端材を集め立体的に組み合わせる造形であるが、構造的な理解と道具の扱いに慣れていないと実に難しい技法でもある。それぞれ文具の担当ごとに分かれたグループが、悪戦苦闘しながら最後まで諦めず、積極的な取り組みをみせた。



「作品の完成後、みんなの手形をサインに」

3. 中等科三年生

三年生の授業作品には、版画や手の木炭デッサン、Tシャツ、平面構成、墨の風景画、さらに木工の器やスプーン

など、素材や技法に多彩な作品が並んだ。美術展に向けた合作としては、垂木を構築し高さが約2.5mもある巨大なクマとペンギンを制作した。二年生の立体表現が外形的であるの対照的に、形の変化を面で捉え、その面の変わり目に垂木を立てる、非常に構造的な造形表現が特徴であった。

また看板やクマが銜える鮭リモコンなど小道具は木彫で丸彫り、テレビ画面は端材を組み合わせた表現で制作。クマとペンギンの表面には色彩に分かれた布を覆い、テレビ画面にはアクリル板を使用するなど、細かい所まで気を使った素材の使い分けをみせた。テレビゲームをしているといったモチーフの設定や立体をポリゴンとして捉えるなど、生徒の世代ならではの形の捉え方がそのまま造形表現へ現れた点が、特に印象に深い。立体造形という非常に難しい課題に果敢に取り組んだ良作である。



「チームワークで立体構造を組み立てる」

4. 高等科一年生

四年生の授業作品は、友人の内面をよく捉えた木炭デッサンや墨の風景画などがあるが、合作の数とその迫力が圧巻である。テラコッタのレリーフはそれぞれにグループの個性を良く表し、伸びやかで素朴な粘土の質感を上手く生かした合作である。また葛飾北斎作の「神奈川沖浪裏」をモチーフに、段ボールで支持体から制作した絵画は、縦4m、横5.6mにもなる巨大な壁面である。同様の技法で制作された歌川国芳作の「相馬の古内裏」と併せ、男子部体操館で来場者を圧巻していた。

北斎をモチーフにした画面では、分割された個々の画面に担当した生徒ごとの違った解釈の青が塗られ、全体としては線の統一化が図られているところに、合作ならではの良さが光っていた。また立体の合作を担当したグループは、

一人一人が自分の好きなテーマで木彫を彫り上げ、最後に男子部スロープ横にある楓の木から空間的に吊り下げる、インスタレーションの表現に取り組んだ。自然とコラボレーションし、さらにコンセプトが行き届いた表現に積極的な姿勢が見られた。



「木に吊るすオブジェとして木彫制作」

5. 高等科二年生

五年生の授業作品は、アルミ線を巻いたオブジェや植物の墨絵などが並んだ。美術展に向けての合作では、男子部芝生中央に巨大な抽象のモニュメント、男子部スロープ右手前の林の中に東屋をそれぞれ制作した。モニュメントは三本の塔から成り、和、洋、異といったテーマが個々に設定され、白い壁で繋がった三角形の構成を特徴としている。



「名栗の丸太でモニュメント制作」

一方で東屋は、六角形のシンプルな構造で、色づいた季節ならではの草木で覆い装飾した。どちらも男子部生が代々植林してきた名栗の山から、労働の授業で運びだした丸太を使用した。建築的な発想が特徴的に表れた学年で

あり、丸太を構造体として組み立てるといった非常に難しい作業ながらも、高等科生らしく知恵と技術で上手くクリアした優作である。学園ならではの生活が導いたともいえる個性的な表現であり、大人らしさと子供らしさの融合した感性が際立った。

6. 高等科三年生

六年生の授業作品には、音を表現したドローイングやアルミ板を鍛金した抽象的なオブジェが並んだ。なかでも今回合作として取り組んだ影絵は、今回の美術展全体の中でも、最も来場者の注目を集めた作品の一つであり大きな反響があった。



「廃材を組み合わせせて影を構成する」

制作にあたっては、はじめに6つのグループに分かれ、それぞれにどのようなテーマの作品にするか、コンセプトを練るところからスタートした。制作に使用した素材は壊れたPCの破片や傘の芯、使い切った絵の具のチューブなど多岐にわたる学園で集められたゴミだ。それらをあえて用いた表現を試みることで、どのような独自のコンセプトが生まれるか、非常に難しい課題でもあった。生徒たちはそれぞれに、ゴミを拾う人や都会の遠景など、非常にメッセージ性の高いテーマに取り組んだ結果、最高学年らしい知性が垣間見える斬新な表現へと昇華させた。男子部の美術教育における、学びの目標でもある創造性とは、特別な環境の下でなくとも限られた身の回りの素材で自己の意識を表現することのできる力である。彼らはこうした学びの本質を十分に理解し発揮してくれた。

Ⅲ.美術展を振り返って

今回の美術展における男子部の展示作品を振り返ると、新たな感性とその可能性に触れることができたのではないかと感じている。少しずつではあるが、美術教育を通じて、自己の感性に基づいた創造性に気付き始めている様子が、生徒一人一人にみえた。良い悪いといった美の価値基準は実に様々で、時代によっても常に変化するものである。しかし、「モノづくり」という技術と精神性の一体を求めるこの本質は、日本特有の文化的価値意識として、脈々と生き続けている。単に形あるものとして作品が出来れば良いのではない。自己の精神を形にすること。つまり作品として出る形に、同時に作者の精神性を宿すことができたかどうか。また見る側にとって、目の前の作品に作者の魂を感じることができるかどうか。「モノづくり」とは有形であり無形でもある心技一体という本質を持つと信じている。日本の文化、例えば武術においてもその本質は同じである。この価値観は時代や時間、場所といった環境をすべて超越したところにある。私が男子部の美術科として終局的に求めるのは、こういったところでもある。上手な作品を作る必要はない。しかし下手な作品を作るのもよくないといい、とことん自己と向き合い、突き詰めた作品を作りなさいと指導する。そもそも良い作品というものこれといった答えを言うことはできない。それは、一人一人がその答えをそれぞれの精神に宿しているからである。私が生徒たちに求めているのは、「モノづくり」を通じた学びである。この本質をよく理解し、それぞれが今後の生き方に繋げる契機になったとなれば、今回の美術展の意義は大いにあったといえる。しかしその吟味に、もうしばらくの時間が必要となるのが、また教育の現場でもあるのだ。



「男子部生の合作を囲んで 中等科2年」



「イニシャルと色彩構成 中等科2年」

〈以下、本文中で触れられなかったその他の作品写真〉



「男子部の看板」



「土を焼いて動物を作る 中等科1年」



「男子部芝生に巨大なクマ 中等科3年」



「木廊で好きなモチーフをブローチに 高等科1年」



「廃材を利用した影絵 高等科3年」



「合作で大きな版画に挑む 中等科1年」



「男子部体操館内の展示の様子」



「自然素材でアサンブラージュ 中等科1年」



「巨大な文房具 中等科2年」



「浮世絵をモチーフに合作 高等科1年」



「篆刻 中等科2年」



「正門前モニュメント」